

日本医療思想の源流

長瀬 治

日本の医療思想の起源が、神代時代の大国主命と少彦名命の二神にあるとする考え方は、ほぼ通説となっている。

たしかに、大国主命は、因幡の白うさぎの傷の治療に、淡水消毒・蒲黄・保温の外科的技術を教示したことなどから、技術医療の創始者と考えられる。けれども少彦名命については、『日本書紀』の一書の「(二)神が力をあはせて病を療むる方を定む。又鳥獸・昆虫の災異を攘はむが為は、その禁厭むる法を定」めたとの伝承を根拠にして、大国主命と同列同等に扱う通説は、一考を要するように思われる。少彦名命の伝承の多くは醸造の神としての「恩頼」(みたまのふゆ)の讃辞かまたは国造りの協力者としてのそれである。

この神酒は我が御酒ならず 神酒の司 常世に坐す 岩
たいたす 少名御神の 神寿き 寿き狂はし 豊寿き 寿

き廻ほし 献り来し御酒ぞ あさず飲せ ささ (神功皇后記。紀もほぼ同じ)

は記紀ともに醸造の歌謡である。「少名彦薬」「少名彦薬根」はいずれも今の「せつこく」の古名である。岩・古木に着生する蘭で強壯・鎮痛・健胃等の煎じ薬として用いられるが、少彦名神が用いたのでこの名を伝えているのだという。他の『風土記』『万葉集』の伝承はいずれも「大国主・少彦名」と並称して、国造りの神となつているところが、きわだった特徴になつていゝ。

そもそもこの神は、大国主命が出雲の美保崎に居られる時に渡来して、大国主命の国造りの協力者となつたもので、むすびの神の御子である。「むすび」とは新しい生命を生む意であるから、少彦名命には当然そのような新生命を生み出すはたらきが備わっていると理解されていたはずである。醸造はそのような理解の上に成り立っていたと思われる。「病を療むる方を定」めたというのは、薬草を用いての治療をさすものと考えられる。しかし「鳥獸昆虫の災異」や「禁厭むる法」とかは文献のみを資料とするかぎりでは、理解は困難というほかない。思うに、国造りにと

って最も重要なことは、病魔、病氣を撃退することであるから、そのはたらきの神格化として、体の小さな少彦名神が信仰されたものか。それにしても、原始未開の社会に必須の祈禱医学の記録がないのはなぜか。それが最大の疑問となる。

この問いかけに対し、演者は次のように考えた。すなわち、日本の古代信仰の世界では、神には国つ神と天つ神とがある。国つ神はその土地の土着の土俗神であり、原住民の信ずる神である。これに対して天つ神は、大空はるか、海彼岸より飛来して幸さきをもたらす神、換言すれば土着神に對する移住民の信奉する神である。日本の創世期神話が、前住民の出雲族と新移住民の天孫族との葛藤からしだいに和合、統一に向かう時代のものであることはよく知られている。少彦名も大国主も、出雲民族の祖先神であり、この説話は出雲神話である。それならば天孫族の医学説話は、記紀のいずこにあるのか。演者はそれを倭建命の説話にあると考えている。この説話は、朝廷の威令に従わぬ賊の平定伝承に終始している。ところがよく見ると、賊を征伐する話（五例）よりも、「山河のまつろはぬものどもを言向

け和す」（十例）との記述の方が数量的に多い。つまり山や河の、昼なお暗く陰湿な所にかくれ住むさまざまな悪魔神、なかでも誰しもが最も畏怖する病魔を、言葉によって、つまり祭りによって帰順させたというのである。これは明らかに病魔征圧の祈禱であり、言わば予防医学である。

日本の古代国家が、出雲と倭との二大文化の相克から統合への過程を経て成立したことを考えると、前者は技術的、外科的、薬草的医学を伝承していたのに対して、後者は、強烈な祈禱による医療を堅持していた。そして倭民族が、武力的、政治的に優位に立っていたがために、医療もまた技術よりも祈禱が、価値の高いものと信じられるような風潮が、支配的になったのではなかったか。しかし、允恭天皇の三年、良医を新羅に求めて天皇の御病いを治め得たところから、外国渡来の新羅医、高麗医、唐医、あるいは寺院による僧医などの、薬餌的、技術的な医学を導入せざるを得なくなつて、技術医学が急速に発展するようになる。やがては典藥寮の設置などもあつて、日本医学も漸く本格化する。それにしても、その典藥寮の名医が、出雲氏、

和氣氏であったというのは、やはり出雲族出身の医師にこそ、技術医学の伝統が継承されていたからではなかったか。この視座からの日本医学史の展望を試みたいと思う。

(杏林大学保健学部国文学教室)

アムステルダム大学附属図書館 所蔵の『解剖学表』について

酒井 恒

『解剖学表』の蘭訳者 Gerardus Diction について調べるために、一九八七年十月、アムステルダム大学附属図書館を訪れた。Gerardus Diction が『解剖学表』を蘭訳（一七三四）したこと以外、新たな発見はなかった。

しかし、同図書館が、『解剖学表』を七冊所蔵していることが明らかになった。年代順には、一七三二（羅）、一七三四（仏）、一七三四（蘭）、一七四四（羅）、一七四八（羅）、一七五五（羅）、一七六五（羅）であり、ラテン語版五冊、オランダ語版、フランス語版各一冊である。一七五五年版には、クルムスの肖像の銅版画があり、この本では、前半に本文（三十八ページ）、後半に註（七十八ページ）がまとめてあり、二冊を合本したようにみえる。一七四四年版は、『解剖学表』の名が示すごとく、各譜図中の